

ぬすびとの刀かうがい小刀杯を拔取ことをしたり、是故に盜人をぬきしと云し今のすりと云が如し、

〔梵舜日記〕慶長十二年四月十九日辛亥、申樂能、觀世大夫、實生大夫兩人之立會也、巳刻ニ始、略○中豐國西總門之於内、スリ盜人在之、板伊州奉行二人爲沙汰、成敗申付也、九月十八日戊申、神事如常、略○中神供所之邊、スリノ盜人アリ、各追出、大鳥居於邊殺了、

〔續日本後紀仁六明〕承和四年十二月甲午、夜分女盜二人昇入清涼殿、天皇愕然、令藏人等告宿衛人、遂捕之、纔獲一人、其一人脱亡、

〔古今著聞集偷盜十二〕隆房大納言檢非違使別當のとき、白川に強盜入にけり、其家にすぐやか成者有て、強盜とた、かひけるが、なにごとなく強盜の中にまぎれまじはり來ける、うちあはんには、まおほせん事かたく覺えければ、かくまじはりて物わけん所に行て強盜の顔をも見、又ちりぢりにならん時に、家をも見入んと思ひて、かくはかまへけり、扱ともなひて、朱雀門の邊に渡ぬ、をの物を物わけて、此男にもあたへてけり、強盜の中にいとなまやかにて、こゑけはひよりはじめてよに尋常成男のとし廿四五にもやあるらんと覺ゆる有、どう腹卷に左右ごてさして、長刀を持たりけり、ひをぐ、りの直垂はかまにく、りたかくあげたり、諸の強盜の主とおぼしくて、ことをきてければ、みな其下知にしたがひて、主のごとくになん侍りけり、扱ちりぐに成ける時、このむねとの者のゆかかん方を見んと思て、尻にさしさがりて、見がくれく行に、朱雀を南へ四條迄行けり、四條を東へくしげ迄は、まさしく目にかけたりけるを、四條大宮の大理の亭の西の門の程にて、いづちかうせにけん、かきけすがごとく見へず成にけり、さきにもそばにもすべて見へず、此築地を越て内へ入にけりと思ひて、そこより歸りぬ、朝にとく行て跡を見れば、件の盜人手を負て侍けるにや、道に血こぼれけり、門のもとにてとまりければ、うたがひもなく此内